説教20201011テモテへの手紙 二１：15-18 　讃美歌494 398 502

 説教　「人間の失敗」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

人間は失敗する者です。私自身のことを申し上げますと、今日の説教題を「人間の失敗」と名付けたのも失敗でなかったかと、一時期思っていました。といいますのは、先週の竹井先生の説教は「涙はこらえるのではなく」という題でしたが、その素晴らしい題を見て、それに引かれて教会に足を運んだ、という方がいたのを知ったからです。

　それに引き換え、今週の説教題を「人間の失敗」と名付けたのは、私の脳裏にぱっと浮かんだもので、聖霊の導きといえばいえるでしょうが、果たしてこのネーミングで、竹井先生のように聴衆を引き寄せることが出来るのか、このネーミングは失敗だったのではないか、と思い悩んだわけであります。

　これ以上言いますと、伝道師が全てを主なる神に委ねていないことを証していくことになりますので、ここらへんで止めますが、ともかく、今の世の中で、失敗をするということはどういうことかを示す好例かとは思います。

　失敗するということを定義づけるのは意外に難しいのですが、私が考えた一つの定義を申し上げたいと思います。それは「自分たちが思い描いている理想や目標に到達しないこと」ということではないでしょうか。ここで「自分たちが思い描いている」というのが重要です。現代人はとにかく自分たちで先ず、理想や目標を設定してから、それを達成できるように奮闘努力するという習性を身につけていると思います。そして今の社会全体がそのような雰囲気の中にありますから、自然、今の人たちは失敗すること、理想や目標に達しえないことを、何か悪いことのように捉える様になり、とにかく失敗することをおそれ、とにかく、失敗したくない、失敗することを避けたいという思いに取りつかれているのです。そして、自分を含め、周りの人々が失敗をすることに対し、非常に不寛容になっています。

　そのような姿勢は、失敗の反対である成功への執着という形をとるでしょう。とにかく今の人たちは、常に成功し続けねばならない、ちょっとでも失敗したらもうおしまいだ、などという一種の神話的世界に投げ込まれいるといってもよいでしょう。

　そして、もう一点指摘しておきたいのは、このように私たちが日常大変気にしております、その失敗－成功という枠組みは、とても空しい、ということに私たちが気付きつつあるということです。例えば、今の世では、もはや成功するということが、自分の救いや幸せと同義語ではないし、かえって成功することが、不幸を招くことも多々あることに、私たちは気付いているのではないでしょうか。それでも、私たちは成功することへの執着を止められないのです。なぜかというと失敗して悪く思われるのが怖いからです。

　さて、今の、この世の状況についてしばし語らせて頂きましたが、では、それに対して聖書の世界はどのようになっているでしょうか。実はこの、新共同訳聖書中に「失敗」という語はたった３回しか出て来ません。成功という語は旧約聖書の箴言を中心に２４回出てまいります。ただ、成功のもとのヘブライ語、サーカルは、成功そして知恵、これはソロモンの知恵であり、蛇の知恵でもあるのですが、その知恵と成功とを合わせたようなことを意味しているのです。つまり現代日本語での成功の意味内容とはかなり違うことを、聖書の成功という語は、さし示しているのです。

　つまり、じつに幸いなことに、聖書では、今日の日本の失敗―成功という枠組みとは全然違う原理が説かれているのです。その原理というのは、難しい事ではなくて、冒頭にも申し上げましたように、私たちが主なる神を信じて、すべてを主なる神にお委ねしていくということです。すべてをお委ねすれば、成功に執着する必要もなくなりますし、失敗を恐れることもないのです。又、失敗ということ自体もなくなるでしょう。

　そこら辺のことを具体的に聖書に即して、説明しますと、先週の聖書箇所で、マリアは「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかったでしょうに」とイエス様にひれ伏して言いました。これに現代人のメンタリティーに引き付けて、言い換えますと、次のようになるでしょうか。「イエス様、あなたがこの場を離れなければ、私の兄弟が死んでしまうという失敗は避けられました。」マリアにこのようなメンタリティがゼロということではありません、ですから、これを聞いたイエス様が心に憤りを覚えられたのかも知れませんが、ともかく、聖書の世界では、皆さん、成功への執着とか、失敗することを恐れるとかいったメンタリティははなはだ希薄なのです。

　しかし、失敗は成功のもとといったような、現代風に引き付けた説教も、インターネット上に多く掲載されておりまして、参考になります。とくに興味深かったのは、「聖人たちの失敗談まとめ１２選、失敗が怖い人はこれを見よ」という記事です。これは牧師が書いたのではないのですが、一人のクリスチャンによるものです。

そこに誰の名が挙げられているか、

禁断の果実食べちゃった！(アダムとエバ)

弟に嫉妬して殺しちゃった！(カイン)

酒に酔って全裸になっちゃった！(ノア)

奥さんを妹って偽っちゃった！(アブラハム)

神様の命令無視しちゃった！(モーセ)

惚れた女に弱点バラしちゃった！(サムソン)

ハゲを馬鹿にされてキレちゃった！(エリシャ)

人妻を妊娠させてその夫を殺しちゃった！(ダビデ)

異教の神様を拝んじゃった！(ソロモン)

イエスキリストを裏切っちゃった！(イスカリオテのユダ)

イエスキリストを3回も知らないって言っちゃった！(ペテロ)

イエスキリストの復活を疑っちゃった！(トマス)

皆さん、思い当たるふしはあるかと思いますが、私も気になってどんな失敗だったのか調べました処、ただ、一点、イスカリオテのユダが、銀貨３０枚を祭司長や長老たちに返そうとして、彼らに拒否されたという失敗以外は見出すことは出来ませんでした。それ以外は失敗の話ではないのです。例えば、ダビデはウリヤの妻ベト・シェバと不倫関係にありましたが、そして後に、「私は主に罪を犯した」と主なる神に懺悔をした後も、全く、自分は失敗をしたと思ったことは一度もなかったのです。すなわちダビデは、自分が思い描く理想や目標に向かって生きていたわけではないのです。

さて、今日の聖書箇所に入りますが、１５節迄と、１６節からではその内容が好対照となっています。１５節「あなたの知っているとおり、アジアにいる者たちは皆、私を離れて行きました。その中にはフィゲロとヘルモゲネスがいます。」というのはうまくいかなかった話、今風に言えば失敗談でありまして、１６節からは反対にうまくいった話、成功談です。最もすべてをイエス様にお委ねしているパウロですから、うまくいく-いかないというのも語弊がある表現ではあるのですが、

ともかく、全ては御心による出来事ですので、１５節のほうのアジア州の人々、殊にフィゲロ、ヘルモゲネスのことを覚えて、パウロは主の祝福によるお守りを祈っていたことでありましょう。いつか彼らが、目覚めて、イエス様に立ち返る日を心待ちにしていたことでしょう。アジア州と云えば、はるかに今のこの日本も含まれるかもしれません。この時のパウロの祈りは、時空を超えて今のクリスチャンたちにそのまま引き継がれているといっていいでしょう。

　次に１６節からに入りますが、パウロはオネシフォロのことを話し始めます。オネシフォロは、パウロをしばしば励ましていた、とあります。オネシフォロは日頃、パウロのことを覚えて祈り、彼のことを心にかけていたのです。オネシフォロについてはエフェソの教会の信徒で、パウロと共にいたということくらいしか、分かっていません。オネシフォロとパウロが実際にどんな風に協力して伝道していったかということは、聖書には記されていないのです。ある意味、そのような成功談的な事柄は、聖書にとって重要なことでないからでありましょう。しかし、聖書は次に非常に具体的な事柄に触れています。

「彼は、私が鎖につながれていることを恥とも思わず、ローマに着くと私を熱心に探し、見つけ出してくれたのです。」つまり、これは、パウロの後を追ってローマに来たオネシフォロが、とにかくパウロに会おうと思って、恥も外聞もなく、あちこちの牢獄を尋ね廻って、やっとのことで、彼が投獄されている牢獄に尋ね当たり、会うことが出来たということでしょう。これは今風に引き付けて言えば、パウロとオネシフォロの感動的な再会成功談とでも言えるでしょうが、前にも申し上げました通り、聖書の世界は、今の世の中とは全く違うことを説いております。オネシフォロは成功し、アジア州の人々は失敗した、という枠組みとは全く別のことを、聖書は示しているのです。

　オネシフォロとパウロとは、ある意味、二人だけの幸せの世界に入れられました。二人は神の御前に土の器であり、何も誇ることはないけれど、こうして牢獄で再開できて、何物にも代えがたい喜びを得たのでした。この時の獄中のパウロを救ったのは、オネシフォロという土の器でした。二人は何か素晴らしい理想や目標を自ら思い描いていたわけでもないのに、御心に従って歩んでいくうちに、やがて、この二人だけの幸せの世界に入れられたのです。二人だけの幸せの世界ということを強調してきましたが、、それというのも、そこに、今を生きる私たちすべての人があこがれている、いわゆる二人だけの愛の世界と重なるところがある様に思えるからです。

　この時の獄中のパウロにとってはオネシフォロがただ一人与えられるだけで充分でした。パウロのもとに、オネシフォロが土の器を携えて、遣わされたのです。その土の器は、中に入れられている神の愛の光を十分に放って、パウロを新たに生かして、救ったのでした。聖書の世界の言葉を用いるならばオネシフォロは御心によって、パウロのもとに遣わされ、二人の再開は成就し、神の愛が二人を救ったのです。そして主なる神がこの二人を豊かに祝福したので、二人は大いに喜んだのでした。

　神の祝福というのは伝染するものです。それが福音を宣べ伝えるということかも知れません。オネシフォロとパウロの二人だけの世界と申しましたが、それは、決して、二人だけの世界に閉じ込められるということではありません。

　むしろそれは小さなイースト菌が、パン全体を膨らませるように、世界に拡がっていく世界です。その世界の真ん中に主イエス様がおられます。真中といっても主イエス様はどこにでもおられる方ですので、私たち一人一人と二人だけの世界を築いてくださいます。そしてその二人だけの世界が基礎となり、やがてオネシフォロを通して、そして、アジア州の人々一人一人を通して、その世界は全世界へと広がっていくのです。

　私たちは聖書の世界の基本である、すべてを主イエス様に委ねて歩むということを、恐れずに実行していこうではありませんか。そうすれば、私たちは失敗することなく、主なる神の豊かな祝福の、永遠の喜びに入れられることが確実なのです。

お祈りします

天の父なる神様、今日はこの兄弟姉妹を御前に集められ共にあなたを礼拝賛美出来ますことに感謝します。

パウロそしてオネシフォロはその身を持って、あなたの愛による救いの道を証してくれました。どうか、今を生きる私たちもあなたの愛のまことの救いの力を悟り、その愛のうちに献身をしていくことが出来ますように。

今、この世に建てられております神学校、殊に東京神学大学を祝福し、この世の知恵ではない、あなたからの知恵と真理とが伝えられる場としてください。あなたの福音を告げ知らせるパン種が養われ、地にある教会に遣わされて、あなたの栄光が豊かに顕されますように。

私たちが許されない失敗を犯した時も、あなたは御前で心から悔い改める者を憐れみ、赦しと救いを与えられます。どうかその救いの道を私たちが宣べ伝えていくことが出来るようにして下さい。

今、悩んでいる方、悲しんでいる方、孤独を感じている方々に、あなたの救いの御手が差し伸べられますように。

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配しておられます私たちの救い主イエスキリストのみ名によって祈ります。